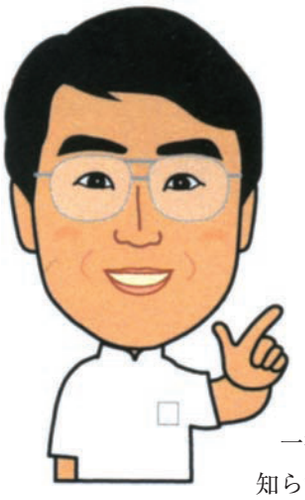


歯医者さんが教える 歯と口腔の健康管理

〔第34回〕親知らずについて

監修／歯学博士　鹿島　健司

一番後ろの奥歯（第三大臼歯）が親知らずで、智恵がついた頃に生えてくることから智歯（ちし）とも呼ばれています。英語ではwisdom toothになります。他の永久歯は通常６～12歳の間に生えますが、生えてくる時期がこれよりずっと遅く（概ね10代後半から20代にかけて）、生えてきたのを親が知らないことから親知らずと呼ばれるようになったといわれています。すべての人に生えてくるわけでなく、上下左右４本生えたり、１本しか生えてこなかったり、また、全く生えてこない方もいます。

現代人は食生活の変化から顎の発達が退化傾向にあり、親知らずが生えるスペースが確保できず、正常に生えるケースが少なくなっています（**写真１**）。

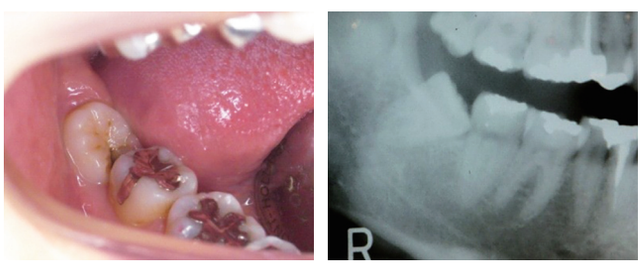


写真１　斜めに生えてしまった親知らず（左）とそのX線像（左）

中途半端な生え方をしている親知らずは食物のかすが溜まりやすく歯ブラシでも清掃が難しいため、むし歯や歯周病になりやすくなり、また智歯周囲炎という親知らずの炎症を起こして化膿したりする厄介な存在になってしまいます（**写真２**）。

写真２　親知しらずだけでなく、手前の第二大臼歯までむし歯に！

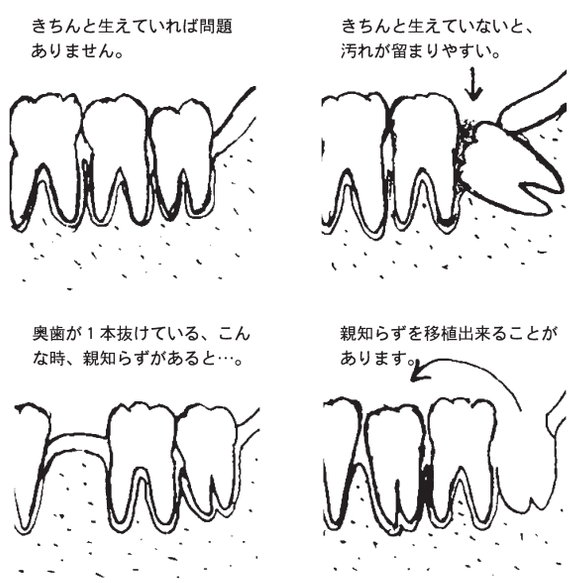
また、支えがないと、歯は前方へ進もうとする性質があります。まっすぐに生えず前に傾いている親知らずは、すぐ前の第二大臼歯を押していることになり、歯並びを悪くしてしまうことがあります。

そのため、歯列から外れた場所に生えたり、繰り返し炎症を起こしたり、反対側の歯肉や粘膜を噛んでしまうようなケースや大きなむし歯になってしまった親知らずは抜歯が必要となります。その場合、若い方が傷の治りが早い、年齢とともに親知らずと骨の癒着がすすみ抜歯が困難になる、高血圧や心臓病など全身的な疾患があると抜歯に伴う危険性が増す、などを考慮するとできるだけ若いうちに抜いておかれることをお勧めします。特に女性の場合には、妊娠中に親知らずが炎症を起こすこともしばしばあり、治療に難渋することがありますので、妊娠前に親知らずを抜いておかれといいでしょう。

親知らずは必ず抜歯しなければいけないということはありません。きちんと正しい位置に生えて機能していればほとんど問題はありません。前述のように、周りに害を及ぼすような親知らずは抜歯した方がいいのです。

ところで、親知らずも時には非常に重宝することがあります。むし歯などで抜いてしまって歯がないところや、残せないようなひどいむし歯があって抜歯をしなければならない場合、ある程度まっすぐ生えている親知らずであれば、そこに親知らずを移植することができます。これを自家歯牙移植といいますが、謂わば親知らずのリサイクルです。それまでは役に立たなかった親知らずが、移植することで立派に機能するようになります。しかし、自家歯牙移植にはいろいろ条件を満たさなければならない事が多く、誰にでもできる訳ではありません（**下図**）。

親知らずでお困りの方は、かかりつけ歯科医に相談し、場合によっては口腔外科の紹介を受けられるとよいでしょう。



監修／鹿島健司（歯学博士）。1958年１月生まれ。かしま歯科医院院長
日本大学歯学部・松戸歯学部兼任講師、川口歯科医師会理事（学術部長）